

推薦レポート

男主人公からみる『住吉物語』

橋 西 穂 果

一 はじめに

本稿は、『住吉物語』について男主人公の視点から検討するものである。

『住吉物語』は、継子である姫君と男主人公が紆余曲折を経て結ばれ、栄華を極める結末を迎える物語である。継子いじめの要素を持っていることから、これまでの研究では、継子物語としての『住吉物語』に焦点が当てられてきた。そのため、継子である姫君を中心とした解釈が試みられ、男主人公に関してはあまり関心が向けられてこなかった。『住吉物語』の男主人公四位少将は、出自、容貌ともに恋物語の男主人公らしい特徴を持ち合わせ、理想的な男主人公像であるという印象を与えてきた。しかし、本文を読み進めていくと随所に理想的な男主人公とはいえないような言動が見受けられ、そこが物語の面白さに繋がっている。そこで、この四位少将に焦点を当て、『住吉物語』で描かれる男主人公像の特異点と魅力について探っていきたい。そのために、『住吉物語』の男主人公の基本的な人物造型を掘り下げていく。

なお、本文は全て中世王朝物語全集Ⅱ『零ににぎる物語 住吉物語』（笠間書院、一九九五年、底本は甲南女子大学本）より引用する。

二 「四位少将」という設定

『住吉物語』の男主人公は四位少将として設定される。現代の私達からすれば、ただの役職でしかないように思えるが、登場人物の官職設定も大きな意味を持っている。設定される官職と想起されるキャラクターには関連性があり、物語において求められる役割やイメージがある程度固定されているのだ。では、「四位少将」という設定はどのようなイメージを持っているのだろうか。これを検討するにあたり、恋物語の男主人公の官職の比較を行った。

王朝物語において「少将」が活躍する物語は少なくはなく、「四位少将」が登場する例もいくつか見られるという。^{〔1〕}しかし、男主人公が「四位少将」であるという例は多くないようだ。物語の主人公の男君または、物語の女主人公の姫君と結ばれる男君を男主人公として、平安後期から中世に作られた主な物語の男主人公の官職を検討したところ、以下のような結果となった。

『落窪物語』…右近少将

『堤中納言物語』

・「花桜折る少将」…中将
 ・「このついで」…宰相中将
 ・「虫めづる姫君」…右馬佐
 ・「ほどのどの懸想」…頭の中将
 ・「逢坂越えぬ権中納言」…権中納言
 ・「貝合」…藏人少将
 ・「思はぬ方に泊りする少将」…少将、権少将
 ・「はなだの女御」…いやしからぬ好色人（官職・身分記載なし）
 『浜松中納言物語』…中納言
 『夜の寝覚』…中納言
 『狭衣物語』…二位中将
 『しのびね』…四位少将
 『しら露』…侍従
 『木幡の時雨』…中納言
 『石清水物語』…伊予守
 『小夜衣』…兵部卿官
 『苔の衣』…中納言

男主人公が「少将」である作品は、『落窪物語』、「貝合」「思はぬ方に泊りする少将」、『しのびね』が挙げられるが、男主人公が「四位少将」として設定されるのは、『住吉物語』の他には『しのびね』のみであった。『落窪物語』は男主人公が物語内で「少将」と呼称されているが、登場時の記述を見ると、「左大将のむすこ右近少将」（『落窪物語』二二頁）とあり、また、『堤中納言物語』の中の「貝合」「思はぬ方に泊りする少将」二作品は「少将」を主人公とする点で『住吉物語』と共通している。若

き貴公子として造型される点は『住吉物語』と類似が指摘できるだろう。平安後期から中世に作られた主な物語においては、「少将」を男主人公とする作品はそれほど多くなく、「四位少将」となるとさらに限られてくる。むしろ「少将」よりも「中将」「中納言」を男主人公に据えた物語が多く見られる。このような結果から、恋物語の男主人公の官職として「四位少将」はそこまで一般的なものではなかったと推測できる。それでも、『住吉物語』の男主人公があえて「四位少将」として造型されている意味について考えていきたい。

「少将」という造型について久下裕利は、少将を主人公とする物語としては、『堤中納言物語』の中の二篇を挙げ得るにしても、短篇物語の主人公としてしかその相貌を確認できないとした上で、「主人公の「少将」は二十才未満の若き貴公子が想定されるばかりである」と述べている⁽²⁾。確かに、『落窪物語』をはじめ、物語の「少将」は良家の子息として造型され、将来の出世が約束された立場にある。登場時は「少将」であるが、物語の展開とともに順調に昇進を果たしていくことになる。そして、まだ妻を持たない状態であることに注目すると、ある程度若い男君であることが想定される。これらの点からも、久下が指摘するように、「少将」という造型には、若き貴公子としてのイメージが付与されていると考えられる。

続いて、「四位少将」という造型について考えていく。堀部正二により男主人公「侍従」から「少将」に改められたことは指摘されており⁽³⁾、稲賀敬二はさらに新版『住吉』に改作されるにあたり、古本『住吉』の男主人公「侍従」から当代の恋物語の男主人公としてよりふさわしくなるよう造型し直され、「四位少将」に改められたとの説を述べている⁽⁴⁾。この説を踏まえると、恋物語の男主人公としてふさわしい官職として

「四位少将」が認識されていたと考えることができる。『住吉物語』と同様に、男主人公が「四位少将」である『しのびね』の記述を確認する。

その頃、時の有職と世にのしられ給ふは、内大臣の四位の少将とかや、まことに光りかかやき給ふ御様は、明け暮れ見奉る人さへあかぬ心地するに、ましてほのかにも見奉る人のあぢきなき思ひの胤となるはことわりぞかし。（『しのびね』一〇頁）

『しのびね』の男主人公は、すぐれた人と評判が高く、出自もよい、光輝くような様子は人の物思いの種となるほどであったと語られる。出自の良さ、優れた容貌という要素を持ち、理想的な男君という印象を受ける。さらに「少将」という造型により、将来を約束された若き貴公子のイメージが付与されており、恋物語の男主人公としてふさわしい造型がなされている。これを踏まえつつ、『住吉物語』男主人公四位少将を見ていきたい。

三 理想的な男主人公としての「四位少将」

「右大臣なる人の御子に四位の少将となべてならぬ人おはしけり。（五七頁）」と紹介されるように、『住吉物語』の四位少将は右大臣の御子であると紹介されており、若くして出世が約束された立場で、並ぶ人がいないほど優れているとも語られる人物であった。このように『住吉物語』の男主人公もまた、出自、容姿ともに優れていると語られており、その点では理想的な男主人公として造型がなされている。

より詳しく考えるために、『住吉物語』の男主人公について、物語内で評価が行われている場面を掲出する。物語序盤、筑前（四位少将の遣

わした端者）が、姫君の乳母子である侍従に、四位少将のことを売り込む場面である。

筑前、「いやしき事ならば、何しに申し候ふべき。おぼえ少なき御宮仕へよりは、この公達におはしまさば、なかなか御心安き事にてこそ候へ。承るようにては、その御宮仕への御事も難くこそ。この少将殿は、今の後の御兄にて、右大臣の御子なれば、御容貌よりはじめて、何はの事につけても、等しき人やおはする。御ため、うしろめたき事をばよもさぶらはじ」と申せば、（『零』に「る物語」
住吉物語』六〇頁）

彼は右大臣の御子であり今の後の御兄でもあったことが、筑前の口から明かされる。出自に関しては申し分なく優れており、将来を約束された若き貴公子のイメージにもふさわしい人物といえる。そして、容貌をはじめ、何事も優れているのだと、本人の能力についても高く評価がされている点からもやはり、恋物語の男主人公としてふさわしい造型がなされていると考えられる。

当該場面において、筑前は姫君に対し、内裏に出仕するよりもこのような公達と結ばれる方が良いのではないかと説いている。しかし、「われ、はかなくなりなむのち、この姫君の事はあはれなれ。なからむ跡なりとも、なみなみならむ有様させ給ふなよ。いかにも、いかにも、内裏へ奉り給へ。あの姫たちにおぼし劣らすなよ」（五四頁）という母宮の遺言により、姫君は宮仕えを強く希望していた。加えて、父中納言もその望みを叶えようとはたらきかけていたという経緯があり、姫君も内裏への出仕以外の選択肢は眼中にない状況だったことが推察できる。

この描写から、一般的に結婚相手として申し分ない貴公子として描かれる一方で、他の選択肢がないほどこの上ない相手として認識されているわけではないことが窺える。決して低い身分ではないものの、高すぎる身分という訳でもない。それゆえに、比較的手の届きやすい人物であることが魅力として語られている点が興味深い。この部分は、『住吉物語』主人公の置かれた立場がよく分かる描写となっている。

以上のことから、姫君との恋の相手に相応しい男主人公の造型がおこなわれていると考えられる。『住吉物語』の男主人公四位少将は、適切な官職と容貌、能力を持ち合わせた人物として描かれており、恋物語の理想的な男君として描き出そうと試みられている一方で、順調に恋を实らせるような圧倒的な男主人公として物語に君臨するわけではないことは注目すべき点である。

四 理想的な男主人公らしからぬ少将―片恋―

では『住吉物語』で描かれる男主人公はどのような人物か。本文を読み進めていくと、四位少将が片恋にふりまわされる姿が目立つことに気づかされる。その姿は完全無欠な男君像とは程遠く、その点では理想的な男主人公とは言い難い。先に順調に恋を实らせるような圧倒的な男主人公として物語に君臨するわけではないと述べたが、『住吉物語』の特徴として、四位少将と姫君の恋の進展の遅さが挙げられる。『伊勢物語』昔男や『源氏物語』光源氏をはじめとする物語の男主人公は恋多き色好みであり、優美な振る舞いで女君を魅了していく姿が描かれる。まさに圧倒的な男主人公として存在し、恋物語の男君の理想像にふさわしいといえよう。対して、『住吉物語』の四位少将の言動はスマートとは言えない。

『住吉物語』において、姫君と男君が結ばれるのは物語後半になってからである。失踪した姫君を捜し求め、四位少将が住吉にたどり着いてようやく恋は成就することになる。それまでは終始四位少将の片恋であった。物語の割合として、片恋であった時間が長く、実らない恋に身を焦がす四位少将の姿の印象が強い。

物語序盤、少将は筑前らが雑談の中で姫君の噂をしているのを立ち聞きます。少将自身「いいかにも思ふさまなる人もがな」と思ひ給ふに、（五六頁）とあるように、理想的な女性と結婚したいと思っていた。また、

少将立ち聞き給ひて、筑前を召して、「見るらむやうに、さもあ
る人はあれども、物憂くて過ぐすなり。中納言の宮腹の姫君、見奉
りにしや」と宣へば、（五七、五八頁）

と、縁談をもちかけてくる相手はいたものの、気乗りせず過ごしていたことが語られる。そんな中、噂を聞き、「いつくしく」いらつしやると評判の姫君に興味を持つ。そして、筑前に頼んで姫君に手紙を贈るのだった。恋の始まりとして、噂から恋文の贈答という流れはごく普通である。『落窪物語』でも、まだ妻をもたない男主人公が、姫君の噂を聞き興味をもったことが恋の発端として描かれている。

まだ妻もおはせで、よき人の女など人に語らせて、人に問ひ聞き
たまひ、ついでに、帯刀、落窪の君の上を語りきこえければ、少将、
耳とまりて、静かなる人間なるに、こまかに語らせて、「あはれ、
いかに思ふらむ。さるはわかうどほり腹ななかりかし。我にかれみ

そかに逢はせよ。『落窪物語』二二、二二頁)

『住吉物語』と『落窪物語』では、後者の男主人公が元々色好みであることが語られるという違いはあるものの、まだ妻を持たない男が姫君の噂を聞き、興味を持ってアプローチをかける点は共通している。しかし、『住吉物語』の四位少将が筑前を通して手紙を送っているのに対して、『落窪物語』の少将は、当初頻繁に懸想文を贈る点は共通しているが、返事がないことにしびれを切らし、直接逢いに行っている点に大きな違いがある。

このアプローチの差は、それぞれの物語の男主人公の特性によるものと考えられる。『落窪物語』の少将は、色好みの性質を持ち合わせながら、落窪の姫君一人を大切にする一夫一妻が強調される。姫君の返事を待たず、直接逢いに行きアプローチする行動は、色好みであるが故の、姫君との距離の詰め方の巧みさが発揮される展開となっているといえよう。加えて、『落窪物語』では、姫君との初逢瀬の後には姫君一筋になっており、誠実さも美德として描きだされている点から、「誠実さ」も理想的な男主人公の要素の一つとなっていることをうかがわせる。

一方『住吉物語』の四位少将は色好みという特性はなく、恋文を贈るというごく一般的な方法でアプローチする。最初の恋文に当然返事はなかったが、四位少将は「はじめはさのみこそあれ。この事叶へなば、この世ならず思ひ侍りなむ」(五九頁)と、より姫君への想いが深まった様子が語られる。しかし『落窪物語』の少将のように、性急に姫君と関係を保とうとするそぶりは見られないのが特徴的である。そんな中、北の方と筑前の計略により、四位少将は姫君と誤認したまま三の君と結ばれることになる。謀られたことに気づいた後、引き続き熱量のこもった

手紙を頻繁に贈るものの、姫君はつれない様子であった。だからといって姫君に強引に関係を迫ることもない。姫君からの返歌がないまま時間ばかり過ぎ、四位少将の想いだけがつのっていく様子が強調される。謀られ、三の君の婿になった後も一途に姫君を恋慕し続けてはいるものの、三の君のもとへそのまま通い続けていることを考慮すると必ずしも「誠実さ」を持った男主人公であるとは言いい切れない。

このように、『住吉物語』の四位少将は恋の駆け引きに馴れた男主人公としては描かれておらず、順調に恋が成就しているわけではないことがわかる。また、姫君に対して一途さを持ち合わせているものの、三の君への対応を加味すると完全に誠実ともいいきれない様子である。これは、理想的な男主人公としてはふさわしくない特性ではないか。

五 理想的な男主人公らしからぬ少将―落ち度―

また、四位少将と姫君の恋の進展の遅さの要因として、四位少将側の落ち度があったと考えられる。具体的には以下の二点が指摘できる。

一つ目は、『住吉物語』では、姫君との縁を結ぶにあたり、関係者への事前の根回しがまったくといっていいほど何もなされていないことが挙げられる。『落窪物語』にて、姫君の意向はともかく、少将と帯刀(少将の乳母子)、阿漕(姫君の侍女)間で少将が姫君と逢う手引きがなされていたのとは対照的である。『落窪物語』の頭注に「帯刀・あこぎという従者たちの恋愛から、主人公たちの恋愛の糸口が開かれる。『源氏物語』をはじめ、物語の恋は従者たちの仲介で始まる例が多く、平安期の恋愛風俗の一端を示しているものといえよう。また、右近の少将と帯刀とは乳母子の関係にあるが、乳兄弟の関係は物語や史実を見ると、実際の兄弟関係よりも強い結びつきがあった⁽⁵⁾。」との指摘がある。関係性

として、『落窪物語』では少将の乳母子帯刀の妻が、落窪の姫君の女房阿漕であつたことが大きい。元々、近しい関係であつたからこそ、恋の仲介が可能であつたといえる。

一方『住吉物語』では、四位少将と姫君の繋がりには、下仕の筑前の伝手のみであつた。筑前は「中納言の姫君の母宮の家の下司にて、大夫と言ひけるが妻」(五七頁)であつたが、長年中納言邸には訪れていなかったようだ。中納言邸と筑前の関係も希薄であつたこともあり、事前の根回し等は困難だつたと考えられる。四位少将からの恋文が突然のものであつたことは、次の場面からも窺える。四位少将が初めて姫君に恋文を贈り、それを筑前が届けた場面である。

さても出でざまに筑前、侍従語らひて、「右の大殿の御子に四位少将と申す人の文にて侍る。かやうの御事ははばかり侍りながら、やむごとなき人のいたく仰せらるるほどに、否みがたくて参り侍る」と申しければ、(五九頁)

筑前から手紙を受け取つた侍従は、このような取り次ぎははばかられるとしながらも、身分の高い人(四位少将)の仰せならばと、姫君に手紙を取り次いでいる。この場面について、「正式の縁談ならば、女性の親や乳母などの関係者に話を通しておくものであるから、「伝へにくき」とい⁽⁶⁾う。」との指摘がある。これを踏まえると、本来事前に話を通しておくべきものであつたが、そのような根回しはなく、四位少将からの頼みごとであつたために、その家柄や身分の高さに免じて、手紙を取り次ぐ対応が取られたことが読み取れる。四位少将側の仲介の段取りの悪さが目立つ場面といえるだろう。そもそも母君の遺言もあつて姫君が宮仕

えを強く希望していたことから、四位少将が縁を結ぶことは非常に困難であつた。また、四位少将と筑前の関係もあまり親密なものではなかつたこともあり、筑前が北の方側に買取られ謀られる要因となつたといえる。

二つ目は、姫君と三の君の取り違えが挙げられる。四位少将は姫君に手紙を贈つていたが、継母と筑前の計略により、その手紙は三の君へと渡された。継母に促され何も知らない三の君は返事を書く。それを受け取つた四位少将は姫君から返事が来たものと思い、この上なく喜ぶのだつた。

筑前取りて少将殿に、「御返り」とて聞こゆれば、少将、たばかりたるも知らず「うれし」とおぼして、急ぎ開けて御覧ずれば、いみじからず、手なんと幼びれて見えけれども、喜び給ふ事限りなし。(六三頁)

騙されていることも知らず、姫君から返事が返ってきたことを喜ぶ姿が描かれる。筆跡が幼く見えるとは思っているものの、この手紙のやりとりの相手が三の君だと気づくことなく、意中の姫君だと思つたまま結ばれる。

かくしつ、いくほどの日数も積もらで通ひ給ひける。少将、何心もなくぞ過ぐし給ひける。幼きさまもことわりと思ひつ、昼もとどまりて見給へば、聞きしほどにはあらねども、なべての人に異なりと通ひ給ひけり。中納言もたばかり様をも知らず、少将殿によるづ言ひ交わし給ふ。(六四頁)

ここでも「幼きさま」を指摘はしているものの、何の疑問もなく過ごしていると言われ、女君を取り違えているとは気づいてないことがわかる。そして、三の君の婿として中納言邸で丁重な扱いを受けていた。ある夜、姫君が住む西の対から聞こえる箏の音に耳をとめ、三の君に尋ねる。弾いているのは姫君だと知り、四位少将は自分が騙されたことに気づくのだった。その心中は穏やかではない様子である。

心の中には、「あさましくたばかれけるものかな」と思ひつつ、「対の方にいかばかりをかしくおぼすらむ。筑前が本意なさ」と思ひつつ、明けもやらぬに出で給ひて、筑前を召して恨み給ふに、申しやる方なくて苦しげにて立ちぬ。

「今は言ふにかひなし。なほ知らぬ顔にて過ぐさむ。あのあたりに聞こえさすな」と宣へば、筑前顔うち赤めて、「何しにか」とぞ申して立ちぬ。(六五頁)

あつさりと騙された自分の浅ましさを嘆きつつ、姫君はどんなに滑稽に思つただろうかと、筑前を恨むが、どうしようもないので、知らない顔をして過ぐすことにしたことが語られる。計略に嵌まってしまったからとはいえ、三の君と結ばれたことは四位少将側の落ち度であり、四位少将と姫君の恋の大きな障害となったことは間違いない。既に三の君の婿である四位少将が、姫君と結ばれることはかなり困難になったといえる。

このように、『住吉物語』の特徴として、四位少将と姫君の恋の進展の遅さが挙げられる。片恋に身を焦がす四位少将の言動はスマートとは言い難く、その点で理想的な男主人公らしからぬ姿であった。そして、

恋の進展の遅さの要因として、四位少将側の落ち度があったと考えられる。

六 おわりに

以上のように、『住吉物語』の男主人公四位少将は、適切な官職と容貌、能力を持ち合わせた人物として描かれており、姫君との恋の相手に相応しい男主人公の造型がおこなわれている。しかし、恋物語の理想的な男君として描き出そうと試みられている一方で、恋の駆け引きに長けた圧倒的な男主人公として物語に君臨するわけではなく、理想的な男主人公らしからぬ姿である。恋の進展が遅く、片恋にふりまわされる四位少将の姿は完全無欠な男君像とはかけ離れている。また恋の進展の遅さの要因として、少将側の落ち度も含まれており、恋の障害を自ら作りだすことになってしまっている。これらの点により、恋物語として想定される流れを裏切る展開となっており、物語の面白さに繋がっている。理想的な男主人公らしからぬ姿ではあるが、それでも実直に姫君を恋慕う四位少将の一生懸命さが伝わってくる。継母からの迫害を受ける悲劇のヒロインを救出するヒーローあるいは色好みの貴公子といった従来の男主人公像とは違う、完璧でないからこそ読者の関心を惹く男主人公として新たな魅力を示したともいえるのではないか。

これらを踏まえると、『住吉物語』の四位少将が理想的な男主人公らしからぬ姿で描かれたことにより、既存の物語からの「ずらし」を生み、想定を裏切る展開により、物語に新鮮さと面白さをもたらしたと考えられる。

注

『落窪物語』本文・新編日本文学全集一七『落窪物語 堤中納言物語』二二頁（小学館、二〇〇〇年）

『しのびね』本文・中世王朝物語全集10『しのびね しら露』（笠間書院、一九九九年）

（1）久下裕利「姿を消した「少将」——本文表現史の視界——」（学苑・日本文学紀要、七六〇号、二〇〇四年一月）

（2）久下裕利「主人公となった「少将」——古本『住吉』の改作は果たして一条朝初期か——」（学苑・日本文学紀要、七七一号、二〇〇五年一月）

（3）堀部正二「新資料による住吉物語の一考察」『物語文学研究叢書第二三卷 中古日本文学の研究』（クレス出版、一九九九年）（初収は『国語国文』一〇卷九号、一九四〇年四月）

（4）稲賀敬二「皇女と結婚した中納言兼左衛門督——住吉物語の人物設定とその成立」『広島大学文学部紀要』、四六卷、一九八七年一月）

（5）新編日本文学全集一七『落窪物語 堤中納言物語』二二頁（小学館、二〇〇〇年）（二二頁、頭注）

（6）新編日本古典文学全集39『住吉物語 とりかへばや物語』（小学館、二〇〇二年）（二五頁「かやうのことは、伝へにくきことなれども」の頭注）

九、恋文の仲介。恋の仲立ち。正式の縁談ならば、女性の親や乳母などの関係者に話を通しておくものであるから、「伝へにくき」という。

参考文献

辛在仁「『住吉物語』と『夜の寝覚』——設定の類似と新しい主人公像の創造——」（『比較文学・文化論集』一八卷、二〇〇一年三月）